

3歳未満児の保育における保育者の役割に関する考察

兼 田 文

(日本児童教育専門学校)

1. はじめに

今日、働く女性が急速に増加し産休明けに始まる3歳未満児の集団保育に対する需要が高まっている。経済的な理由から働かざるを得ない母親もあれば、産休や育児休業制度を利用しながら、自分の仕事を継続しようとする母親も居る。保育所は母親の就労等によって保育に欠ける子どもを受けとめることが第1の機能として考えられていたが、これからの保育は預けられる子どもの置かれるより良い環境を整え、親子関係の安定を中心に、親と子の両方を支えるといった課題が求められる。この背景として考えられることは社会構造の変化による子育て機能の弱体化である。これには、最近の母親が核家族・少子化家族の中で育ており、ほとんどが子育ての様子を見たり手伝ったりする経験のないまま母親になってきていることも指摘される。地域の中でも孤立化し、孤独と不安の中で母子密着の子育て、児童虐待、遺棄、殺害、母親の育児ノイローゼなど様々な問題が社会化している。そこで切迫した保育要求を受けとめ「親子」を地域でサポートし、長いサイクルで子育てを支援する機関として保育所等の各施設では、様々な試みを始めている。

しかし、こういった社会情勢の中で預けられるのは生身の「子どもたち」である。親へのサポートを重要視する必要性もあるが、預けられる乳幼児の状態を正しく把握する必要があるのではないだろうか。親と子の生活条件が厳しくなると子どもの状態も難しくなる。早朝保育から始まり、お迎えはベビーシッター、その後は民間の深夜保育所へという、二重三重保育を強いられる子どもも増加傾向にある。

このような長時間保育の子どもが接する保育者との関係は、特例・延長保育において担当の保育者が何度もかわったり、慣れていない何人もの保育者に受けもたれるということになり、アタッチメントの形成の基本となる人がわからなくなるという子ども側の困惑もでてくるであろう。また数年前ベビーホテルで相次いで事故が起きたことがあったが、それらのほとんどは、事故が起きて当然の設備であったといわれる。親側にとって都合の良い施設であっても、子どもにとって望ましい施設であるかは別問題である。施設を運営していくのもまた生身の人間である。安心して子どもを預

けられるかどうか、施設の責任者や担任と直接よく話し合うことが大切だと思われる。

とりわけ3歳未満児の集団保育は緊張性や切実性のある生活問題をはらんでおり、画一的な保育では通用しない。各々の子どもに適切な援助を必要なだけ行い、親同士のつながりをつくり乳児をかかえながらの家事、子育ての悩みを話し合い交流する中で保育所内でサポートする「人的環境としての保育者」の存在は大きい。

ここでもう一度、子どもに負担を与えず親も安心して預けることのできる社会の実現にむけて、親子を支え援助していく「保育者の望ましい資質と役割」について、事例を通して、考察したいと考える。

2. 事例の検討を通して

1990年改訂の保育指針によれば、「6ヵ月未満児の保育内容」というこれまでになかった低年齢児を対象にした項目もたてられている。3歳未満児についても、発達は可能性に満ちているが、大人の援助なしでは欲求を満たすことはできないという「養護的側面」が強いこと、また、安心できる人的・物的環境のもとで、個々の子どもの生理的欲求を十分満たし、保母の愛情豊かな受容と「援助」を通して、人を愛し信頼する力が育つということが提示されている。

以下、3歳未満児の集団保育における乳児の事例を通して、保育者が果たしている役割や、果たすことが期待されている役割について考えてみる。

〈事例1〉自分の居場所がない2歳児の事例

〔承認者としての保育者〕

いつもは部屋の隅で遊んでいることの多いS男だが、その日はどこを探しても姿が見当たらない。園庭などを探してみたが見当たらない。あちこち探した後、トイレをのぞいてみると一番奥のドアに鍵がかかっている。上から見てみると、自分の便をドアや便器にくっつけてめたくり遊びをしていた。S男にとっては、トイレが一番落ち着いて自分の遊びができる場所だったのか、粘土遊びの感覚なのか理解できず、とても悩んだ。

〈考察1〉

自分の居場所がなくなった時や、居場所づくりに苦勞している時、その子を受け入れ共感してあげること

が必要である。その子自身が見ている世界を、保育者が一緒に見てあげることが必要である。それが、集団や自由遊びの中で、自分の位置を獲得していく基本となる。子どもにとって横に座って見守られることは、自分の存在や行為を承認されることになる。この事例でも部屋の隅で遊ぶことが多いという保育者の理解はあっても、そこで子どもが何を楽しんでいるのかについての理解や、その部屋の隅を彼の居場所として承認されていたわけではない。ただ横に座って見守る保育者の存在が必要である。

子どもを尊重するということは、保育者としての自分を無にしようと努めることではなく、無にできない自分を自覚した上で、子どもにできるだけ寄り添い、子どもの考えや思いを認め合える関係を作ることが大切なのである。

〈事例2〉2歳児の自由あそび場面における子どもに対する保育者の役割〔受容者としての保育者〕

2歳児のM子は、外あそびの時必ず、園の右片隅のブランコをこいで遊ぶ。他児とはかかわらず、こぐリズムに合わせて独り言を言いながら、同じ遊びを繰り返す。お帰りの時間が迫り「お片付けですよ」と担任が呼びかけるが、M子は気の済むまで同じ遊びをやめない。担任は、自閉的な傾向を多少もっている子どもと言っていた。お帰りの紙芝居が始まろうとしていたがM子は帰ってこない。そして、いつもの様にサブの先生がM子を迎えに行き、M子の乗るブランコを持ち、「いち、にい、さん、しい…」と数えながら、「今日も20までこいだらお部屋へ帰ろうね。また明日しようね。」と声をかけると、ブランコで遊び終えたM子は素直に、サブの先生と手をつなぎクラスへと戻っていった。

〈考察2〉

1対1の関係がM子にはまだ必要なようだ。サブの先生が必要なようである。サブの先生が傍らにやってきて同じ遊びを一緒に楽しむ「物理的接近」があって満足するようだ。外に現れた行動の受容も大切だが、「表面に出てこない行動」の理解もまた大切だといえる。サブの先生も最初の頃M子がわからなかったという。「障害」という枠組みでとらえようとした時期もあるという。しかし、最初のかかわりではわからなかったことも、子どもの気持ちをとらえようと自己を振り返り反省すると、子どもにも意識できない気持ちの理解が少しずつ可能になってくると思われる。保育をする中で子どもの育ちに見通しを持ち、保育者と子どもの生活に生き生きとした流れがあるかどうかを常に

点検し、自分自身の実践を反省し、見つめ直していく必要がある。その活動は子どもと共に生活している保育者自身の活動を充実させることでもある。

〈事例3〉1歳児の食事場面における子どもの姿と保育者の与える影響〔モデルとしての保育者〕

食後、R太とU樹は二人で一つの絵本を取り合い、引っ張り合ったりたたき合ったりしながら、奪い合いをしていた。すると少し月齢の高いA子がやってきて「メ。メよ」と片言で仲介をした。そしてその絵本をR太とU樹から取り、言葉にならない言葉で指差しをしながら読んであげていた。すると今まで奪い合いをしていたR太も絵本を指差し、「…んご」（リンゴの意味）と言いながら絵をつまんで、U樹とA子に食べさせる行為をしていた。それを食べるふりをして、さらにA子へも同じ行為をした。

〈考察3〉

筆者は子どもたちの様子を月齢の低い子どもたちへ食事の対応をしながら見守っていたが、同時に言葉の少ない子どもたちでもこれまで関係が育ってきている事実を嬉しく思った。しかし他の保育者から、A子の仕草が筆者にそっくりなことを指摘された。

意識する、しないにかかわらず、子どもの中に保育者が存在することはそれだけで既存の文化や保育の好み、価値観等を子どもに伝えており、何らかの方向性を提示しているといえる。保育者は「見られている自分」が相手の子どもに与える影響なり、食事の援助だ、けでなくそれを見ている子どもとの関係や、子ども同士の関係を作っていることを自覚する必要がある。

3. 今後の課題

本格的な少子化社会を迎え、子どももそれを支える家庭も変化しつつある。子どもも親も良いモデルが近くにないために、乳児をもつ母親も困惑しているように思われる。子どもが伸び伸びと育ち合う場と共に親子の育ち合いとして保育所は新たな役割で求められてきている。保育は人と人との関係の中で営まれる。このような当たり前のことを再び自覚すること、相手があって自分がある。人間関係を子どもに要求するだけでなく、子どもの間にはぐくむことを保育者の役割として自覚していくことが、子どもと共に生活していく上で必要だと思われる。現代の社会環境におかれる子どもにとって、自分を受け入れてもらえる場、安心して生活できる場が、家庭でも集団保育の場でも望まれるであろうし、それに携わる保育者の役割は大きいといえる。